HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本基督教会夕張教会の一棟の会堂を使用したプロテスタント教会三教派 ： 北海道のキリスト教会と教会建築(その六)
Author(s)	川島, 洋一
Citation	基督教学, 28, 29-37
Issue Date	1993-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46532
Type	journal article
File Information	28_29-37.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本基督教会夕張教会の一棟の会堂を使用したプロテスタント教会三教派

北海道のキリスト教会と教会建築（その六）

川島洋一

一、はじめに

本稿はこれまでの「その一～五（註一）」の継続研究であり、キリスト教伝道によって形成された教会建築の形態的（平面・立面）な視点に立ち、建築する側の教会組織との関連性を含ませながら、建物そのものの変遷について考察し、北海道における教会建築の歴史を明らかにする事を目的とする。

今回は、これまでのプロテスタント（以下新教略）教会についての研究成果をふまえて、明治時代から石炭産業で形成された道央に位置する夕張市で、キリスト教の伝道を開始し、一棟の教会建築を三教派が使用して、現在では「日本基督教会（以下日基略）」が用いている教会建築について考察を行なう。

二、三教派（聖公会、教団、日基）介在とその沿革

〈日本聖公会としての創立〉

聖公会の北海道での伝道は明治初期から函館で開始され、その後札幌等の道央へと拡大し、夕張には明治三十六年聖公会伝道会社によって講義所が置かれた。教会は炭坑の町として発展する中で、急増する炭坑労働者への伝道を中心として成長した。また聖公会の特徴である先住民であったアイヌの人々への宣教を明治時代から全道的に行なっていたが、美唄市と同様に炭坑の町での伝道も積極的に行なわれていた（註二）。

大正時代に入ると教会の伝道活動が実り、同十五年十二月に現在の会堂が完成した。しかし昭和五年になると社会的な不況にみまわれ、基幹産業であった炭鉱汽船会社等の事業縮少のため人口減となり、この影響で信徒の転出がみられ、同十五年では信徒六三名、礼拝出席十四名へと教勢は低迷した。

〈日本基督教団への加入〉

軍国主義の台頭で昭和十六年には宗教団体法が発令され新教各教派は「日本基督教団（以下教団略）」に強制的

に統合された。従って創立時の「日本聖公会夕張教会」は、「日本基督教団夕張聖公教会」と名称を変えて活動が続けられ、戦時中には「支那事変特別祈願式」「皇紀二千六百年奉祝式」等の戦争協力を思わせる資料が多く残されていた。同十九年には主管者の徴用によって活動は停滞し終戦となった。

戦後になって、以前からの炭坑は産業復興として再度の発展期となり夕張の町は活性化され、また先勝国の宗教であるキリスト教はブーム的に多くの人々の心をとらえ、教会は主管者が不在にも関わらず、教派に関係なく多くの集会に利用された。その後、同二十三年には「教団夕張鹿ノ谷教会」と変わり、「聖公会」という名称は使用されなかった。

〈日本基督教会に所属〉

宗教団体法の解除により、戦後多くの教会は教団加入以前の教派に戻ったが、創立時の夕張聖公会は「教団夕張鹿ノ谷」と名称は変わったが、聖公会としてそのまま残った。しかし同二十八年になって聖公会には戻らず「日本基督教会」に加入して「日本基督教会鹿ノ谷教会」となり、その後同三十二年「日本基督教会夕張教会」と名称を変えて今日に至っている。

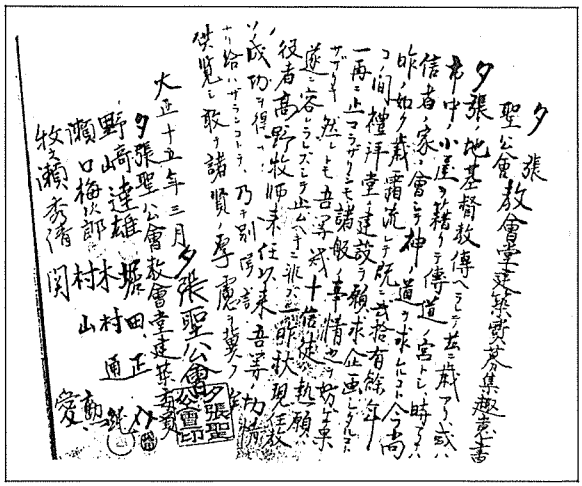
三、教会建築の変遷

〈初期会堂の建設〉

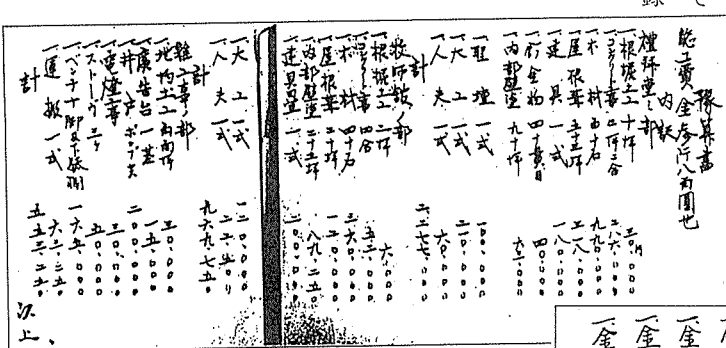
〔取り組み〕 大正十五年の聖公会による初期会堂の建築は、建築委員、賛助者、設立管理者、司牧伝道師等の十二人が呼び掛け人となって、同年三月に作成された「夕張聖公会教会堂建築費募集趣意書(資料―1)」によって始められたが、その中には土地寄贈者、行政関係者等の当時夕張で著名な人物名が記されていた。残されてい

図―1　夕張聖公会新築設計図（T12）
彩色透視図と計画平面図(推定)

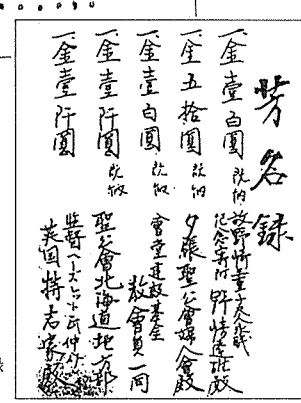
た「予算書（資料－2）」によると、総工費金参千八百円也、礼拝堂ノ部計二、二七七・〇〇〇、牧師館ノ部計九六九・七五〇、雑工事ノ部計五五三・二五〇とあり、また彩色された透視図と「夕張聖公会新築設計図（図1）」が残っていた。更に夕張の鉱区別、地域別に六十二人の「芳名録（資料－3）」も添付されていた。



資料－1　夕張聖公会教会堂
建築費募集趣意書（T12.3月作成）



資料－2　夕張聖公会教会堂建築費予算書（T12）



資料－3
芳名録
（T12）

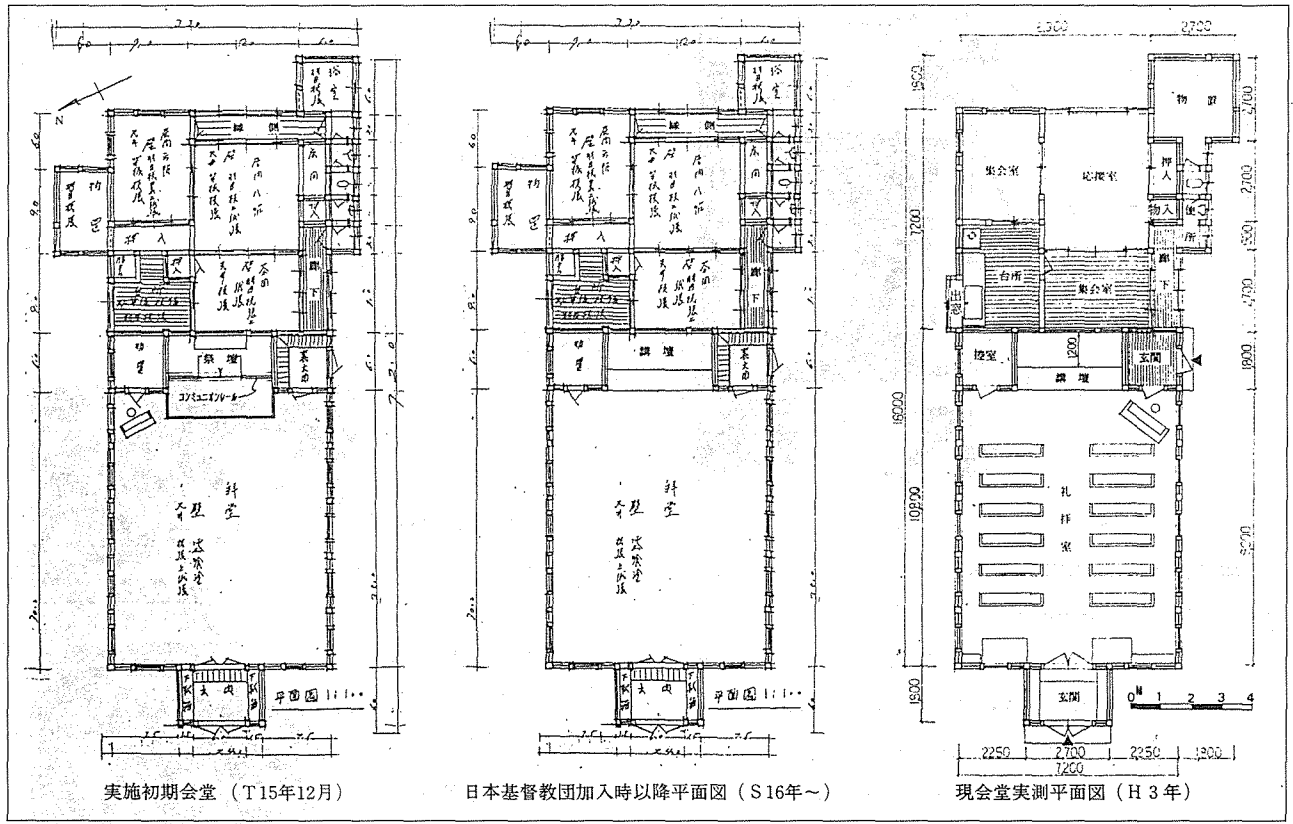
〔床面積〕 残されていた資料によると、建物は両切妻造家根鉄板葺木造平家(見積書・透視図と同じ、筆者記)、床面積聖堂二〇坪、玄関一・三三坪、牧師館一二坪、便所〇・七五坪、計三三・〇八三坪(透視図中の設計図と一致、筆者記)であった。しかし同年九月に書かれた見積書では、延床面積四〇・八三三坪となっていて、また同年十二月日付けの「設計変更ニ付キ増額明細書」でも面積増(縁側、便所、風呂、物置等の建物)はなかったと考えられ、また初期会堂が建設された以降も面積の増減はなく、更に昭和十七年に書かれた平面図の牧師館部分が異なっていた事から、添付されていた透視図中の設計図通りの建築ではなく、実際に建てられた初期会堂は、昭和十七年の図面での四四・四坪の床面積であったと考えられる。(表—1)

〔平面形〕 全体的には東西方向を軸とした長方形の平面で、西側を礼拝室、東側を牧師館として配置(図—2)されていた。礼拝室は長方形平面であり、床面積約二四坪対面形式の信徒席配置であった。また牧師館は田の字型配置となっていた。

〔断面形〕 会堂は棟が高い急勾配の切妻屋根となって

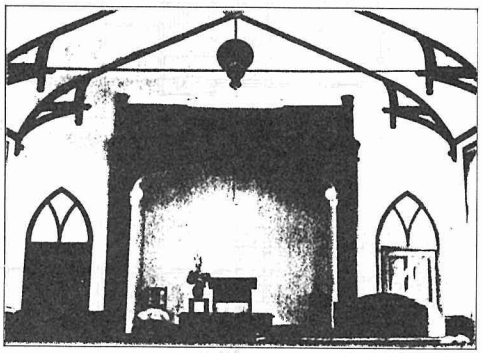
表—1 日本基督教会夕張教会の教会建築床面積(推定)変遷
(大正15年～平成3年)

年代	新・増・改	構造規模 部所	変化部分		延床面積 1階		備考
			㎡	坪	㎡	坪	
大正15年3月	計画	木造平家	———	———	109.17	33.083	聖堂20坪 玄関1.33坪 牧師館12坪 便所0.75坪 彩色透視図中の新築設計図面積 総工費 3,800円 礼拝堂 2,277円 牧師館 969.750円 雑工事 553.250円
大正15年9月	計画	木造平家	25.58	7.75	134.75	40.833	見積書による
大正15年12月〔新築〕	変	北側物置	4.95	1.50	149.33	45.250	設計変更ニ付キ増額明細書 計画図北側便所削除し物置に変更 計画図牧師館南側部分面積増
	変	東側浴室	3.30	1.00			
	変	南側便所	4.13	1.25			
昭和16年	—	木造平家	———	———	149.33	45.250	礼拝室講壇凸部削除 コンミュニオンレール削除 床面積変化なし
昭和28年以降	解	物置解体	−4.95	−1.50	146.85	44.500	北側旧物物置解体
	改	浴室改築	2.48	0.75			旧浴室増改築し現物置
平成3年	—	木造平家	———	———	146.85	44.500	床面積変化なし



図－2　日本基督教会夕張教会の教会建築変遷平面図（大正15年～平成３年）

いて、礼拝室は吊り水平天井ではなく、ゆるい勾配の両斜天井となっていた。従って、小屋組は上り梁の合掌組となっていて、桁部分には引張補強材としてのパイプの水平部材が礼拝室上部を横断し、その両端には木製の装飾が用いられていた(写真－1)。

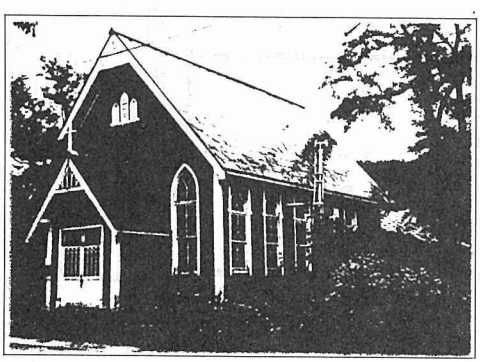


写真－1　現会堂内部正面（H３年撮影）

〔礼拝室内部〕　礼拝室は長方形で短辺方向を正面とし両側の柱と上部水平装飾板による額縁(写真－1)で囲まれた講壇が配置されていて、左右にはドアがありその上部は尖頭アーチの骨組みで装飾されていた。同様に両側長辺壁には、上部尖頭アーチの縦長上げ下げ窓が連続していた。更に前記の水平材としてのパイプと垂直のパイプとの交点には装飾としての円形金属板が用いられ、この円形と調和する様に、両妻壁(短辺方向)上部には直径九〇〇の円形のシンボルマークが付設されていた。内部は全体的にロマネスク調の洋風意匠でまとめられていたと言える。

〔牧師館内部〕　三つの居室は畳敷で、縁側も一部配置された日本における在来軸組構法の和風建築であり、礼拝室の意匠とは異なっていた。ただ台所奥の居室のみに縦長上げ下げ窓(他は引き違い)が使用され、洋風意匠となっていた。

〔外観〕　西側の妻側を高く持ち上げ切妻屋根の断面形をみせる正面（写真－2)は、同じ屋根の玄関棟を中央に配置し、更にこの棟左右に上部尖頭アーチの縦長上げ下げ窓が一対付設された対象形となっていて、塔は用いられず棟上に十字架を置いた簡素な形態となっていた。



写真－2　現会堂外観（H３年）

外壁は下見板張であるが、窓枠や柱によって垂直線の強調がみられ、また妻壁上部には窓型と同様な屋根裏換気のための三連の装飾的小窓があった。また主屋及び玄関棟の棟上部の小さな妻壁は細やかに装飾され、内部と同様にロマネスク調の意匠となっていた。平側は正面の窓と同様な窓が五本等間隔で付設されていた。

牧師館は、切妻屋根下見板張壁、引き違い窓（一ヶ所上げ下げ）で構成されていて、和風意匠であった。

〔設計者・施工者〕 残されていた彩色透視図（図1）と、この図中に描かれた設計図（平面図）には、作成者名及び作成年月日が記載されていなかった。しかし旧北大土木科を卒業し、北海道炭鉱汽船会社の技術者であった信徒である野崎達夫が建築委員の一人であり、また工事関係の多くの領収証の宛先が彼になっていた事などから、恐らくこの建築工事の中心人物であったと考えられ、野崎達夫が趣意書作成時に描いたと推察できよう。そして地元や他の町の業者による見積書が三通あった事から、入札により請負人を決めたと考えられ、最終的には小樽の金子幸作が請負人となって工事を進めた。

〈教団所属後の会堂〉

初期会堂は改築されずにいたが、昭和十六年の教団所属時に内部礼拝室講壇部分が改修（図—2）され、聖公会特有のコンミュニオンレールと、正面壁から凸部分となっていた講壇の一部が取りのぞかれた。

また日基になってからは、牧師館が若干の増改築（物置解体、浴室を物置に）が成され、また礼拝室床・壁等の改修をして今日に至っている（図—2）。

四、現日基夕張教会会堂の歴史的形態の特徴について

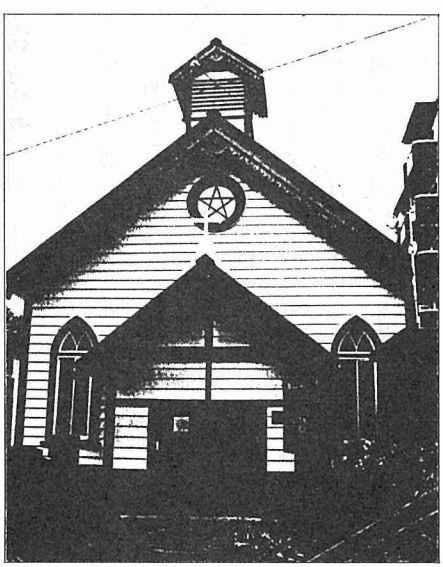
〔建築的特徴〕 大正時代末に建てられた初期会堂が今日現存する会堂の基本形となっているが、教会建築を具体的に提案する設計において、土木を専門としていた野崎達夫が関与したと考えるならば、建築面にも精通した人物であったといえる。

すなわち、礼拝室空間にボリュームを持たせるために天井を水平にすると狭く感じる事から、両斜め天井として高さを充分に確保する小屋組とし、更に水平引っ張り力への補強として細いパイプを用いた点は、天井の高さ強調と正面への視線に影響を極力なくす事に成功したと

言え、土木の力学的知識が役立ったと言えよう。

また、意匠的にも教会建築を研究した点が見られ、特に礼拝室内部の講壇額縁の装飾は、聖公会建築に用いられる手法であり、牧師の意向が強く反映したとしても、そのデザイン感覚には教会建築としての基本形が意識されていたと考えられる。ドアや上げ下げ窓上部の尖頭アーチはゴシックの手法ではあるが、全体的にはゴシックの様な華やかさは見られず、内部天井を支えるように細い斜め梁(リブ状)を装飾的みせる等、控えめな意匠を用いてロマネスク調の会堂にまとめたと考えられる。残されていた彩色透視図は、こうした野口達夫の教会建築への積極的な取り組み姿勢があって作成されたものと考えられ、土木分野での技術がこの作品を通して生かされたと言える。

更に外観正面形にあっては、明治四十一年に建てられ小樽聖公会会堂(写真－3)の置塔(註3)を取りのぞいた形態に類似し、恐らく野崎達夫は、この会堂に影響されて正面形をデザインしたと考えられ、また入札による請負人決定に際しても、この会堂の存在が影響し、小樽の金子幸作になったとも言える。



写真－3　小樽聖公会会堂（M41年建築）

〔会堂と宗教的意図〕　教会建築において各教派の宗教的意図と教会観が、それぞれの建築的要素に強く影響されていると考えるならば(註四)、本稿で対象とした教会建築は、新教内で最もカトリック教会に近いセレモニーを重視する聖公会が、教団加入後も聖公会での教会運営が存続していたにもかかわらずコンミュニオンレールを除去し、また戦後になって日基に所属しても改修もなく、そのままの状態で使用された点は、一つの特徴といえる。

昭和初期からの炭鉱産業の好不景気が、種々な教派に属する信徒の出入りに影響し、教派の区別なく教会運営がなされていて、聖公会にこだわらない教会観があった事が、この一棟の会堂を、三教派が使用できた主な原因といってよい。

五、おわりに

以上、現日基夕張教会会堂の特異な変遷について明らかにしたが、昭和二十年代以降は、教団を離脱して戦前の旧教派に戻る、又留まる教会、そして離脱しても旧教派ではなく本稿での夕張教会の様に他教派に所属する教会等、種々な変遷があった。この様な展開の背後には、昭和十六年の教団設立時の複雑な教派的問題があった事は言うまでもない。

従って、今後は本稿での夕張教会の歩みと類似する教会を対象として、建築の形態的変遷について考察し、北海道内での教会建築の特異な歴史の一面を明らかにする必要がある。

〔脚注〕

（註一）北海道基督教学会編「基督教学」第一七・二一・二四・二五・二六号

（註二）同、第二四号「日本聖公会所属の二棟の教会建築について―北海道のキリスト教会と教会建築（その三）」参照。

（註三）昭和五十一年度日本建築学会大会学術講演梗概集、八〇一三（一六三一頁）参照

（註四）昭和五十三年度同梗概集、九〇九九（二一四九・二一五〇）参照